

## 論文の内容の要旨

論文題目 虚梁から見た高麗時代末・朝鮮時代初期における多包系建築の正統性

氏名 金 碩 顯

### 1. 研究の背景と目的

#### 1.1 背景

多包系組物は、柱の上部に平斗栱を組み、柱間にも中備斗栱を備えた形式である。中備斗栱を設けるという観点から、中国における補間包作の建築や日本の禅宗様（詰組）建築と共通する。朝鮮時代では、多包系組物に当たる形式を、「包」（ポ）として区別していた。

日本人研究者により近代的な建築学が成立した後、韓国建築の系統および組物の形式が分類されてきた。高麗時代末・朝鮮時代初期の建築を分析する際に、日本の中世建築の造営背景（大仏様や禅宗様の導入）を利用し分析する方法が用いられた。特に、杉山信三氏により主張された多包系建築の元代導入説が大きく影響を与え、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築を、導入期の建築とする観点からの研究が多くなされてきた。上述した時期における多包系建築の組物意匠や構成形式、梁架構などの特徴を、元代の影響を受けた結果とする研究が続けられてきた。しかし、元代以前の多包系の遺構が現存する状況で、多包系の成立に関して再考する必要がある。

1950年代以降、韓国人研究者によって、高麗時代末期から朝鮮時代末期までの意匠や構造形式、建築の生産背景など、広範囲に及ぶ多包系建築に関する研究が行われた。研究の蓄積によって、杉山信三氏が主張した多包系建築の元代導入説が反駁されながら、時代による意匠的な変遷や構造形式の変化が明らかになってきた。

しかし、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築に関する先行研究では、バリエーションにあふれる建築の特徴しか読み取られていない。造営の際にどのような建築的な模範に従いながら、多様性を獲得していったのかに関する答えは得られていない。

上記の背景から、造営の際に意図した計画を理解するための新たな研究の方法論の提案が必要となる。

## 1.2 研究の目的

建築における造営形式が定型化され、典型的な建築の建立が続くなかで、正統的な建築が成立する。この正統なる建築を建てる際に、内在する建築的な制限性も現れるようになる。正統性から逸脱しないようにしながら、造営時の制限を乗り越えるという矛盾を解決するため、見せかけるといふ作為が生じる。よって、見せかけるといふ作為の意図から、定型化された構造的・意匠的形式を備え、多包系建築の造営の際に模範となる建築、即ち正統的な建築の特性を把握することができる。そして、制限を克服するための工夫も読み取ることにも可能なのである。

高麗時代末・朝鮮時代初期における多包系建築の特徴と挙げられるのは、虚梁を用いた建築が集中していることである。虚梁とは、梁頭形木鼻を用いる多包系建築において、梁が組物と組まれ木鼻を出す形式を借用し、外観では梁の木鼻として、建築の内側では梁持送りや肘木、木鼻の形状とする部材である。

虚梁を用いた意図を考察し、虚梁から表現しようとした、正統的な建築の修辭的な表現を明らかにする。また、正統性を備えることからくる構造的な制約を考察し、虚梁が発生した原因を究明する。そして、虚梁を用いた高麗時代末・朝鮮時代初期における多包系建築の建築史的な意義を再考し、また、その特質を論じることが本研究の目的である。

## 2. 研究方法と論文の構成

多包系建築の虚梁に関する先行研究は、組物および梁架構の意匠と構造に関する考察から断片的に挙げられてきた。そして、虚梁を使用した建築が現れる大略の時期と個別建築における虚梁の使い方とその特徴に関して言及されてきた。

本研究は、虚梁を使用した建築の時代別の地域分布を調べながら、建築の用途と規模、屋根形式、組物の手先数と虚梁の使用法との関係に関して概論的な考察を先行させる。そして、梁方向別の虚梁の構成と結合形式の特徴、外部と内部での虚梁の意匠的な形状を考察し、虚梁を用いた作為の意図を明らかにする。また、虚梁と組み合う梁架構を類型化し、室内における空間計画に合わせるために用いられた類型ごとの梁架構の特徴を明らかにする。その梁架構と虚梁との関係を考察し、虚梁を設けた意図を明らかにする。上記の考察から得られた虚梁を用いた意図をまとめ、虚梁の発生原因を究明する。そこから、虚梁が表現しようとした正統的な多包系建築の修辭的な表現を読み取る。最後に、高麗時代末から朝鮮時代初期における多包系建築の特質を考察するため、正統的または虚梁をもたない多包系建築との比較を行う。そして、虚梁を設けた多包系建築の特徴が、17世紀以後の多包系建築において継承される部分を明らかにする。

上述した研究の項目を総合的に分析し、結論として、高麗時代末・朝鮮時代初期における多包系建築の特質を論じる。

本論文は、大きく二部に分けられる。

第一部では、虚梁を用いた多包系建築を中心に考察を行う。第1章では、虚梁が使われた建築の時代別の地域分布を調べ、また、建築の用途と規模、屋根形式、組物の手先数と虚梁の使用手法との関係を考察する。第2章では、虚梁を設けた梁方向別の構成と、虚梁が組物に結合する形式を考察し、虚梁の使用の際に用いられていた構成原理を明らかにする。第3章では、虚梁の外観と内部における意匠を考察し、虚梁を通じて意図した計画を明らかにする。第4章では、虚梁と梁架構との関係、特に空間の計画に合わせるために用いられた梁架構を類型別に分け考察を行う。そして、虚梁を設け意図的に表現しようとした、模範となる建築の梁架構の形式や特徴を分析する。第5章では、第1章から第4章までの考察から得られた虚梁からの作為の意図をまとめ、虚梁の発生原因を考察する。そして、正統的な多包系建築の修辭的な表現と特徴を分析する。

第二部では、虚梁を用いた建築と虚梁をもたない多包系建築との比較考察を行う。第6章では、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築における組物を考察し、造営の際に模範となる組物の構成形式を分類する。そして、正統的な組物の構成形式を明らかにし、最高級の多包系建築に使われた組物を推定する。第7章では、梁が組物と結合する形式を考察し、結合類型別の正結合の形式を明らかにする。これを通じて、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築の梁架構の構成的な特徴を分析する。

結章では、本研究の目的である、高麗時代末から朝鮮時代初期における多包系建築の特質を論じる。

### 3. 研究の成果

多包系建築では、様々な梁方向に虚梁が用いられている。梁の方向別（梁間、桁行、隅行）に虚梁を組み合わせ、梁架構に関わらずに、斗栱（平斗栱と隅斗栱）に梁の木鼻を出し、組物廻りの構成と意匠に一貫性を与えようとした。つまり、虚梁を設けた理由は、多包系建築の外部表現における規範を守るためであった。

規範となる外部表現として、組物の構成形式を見ると、一手先から四手先の組物まで、一定の原理が用いられていることである。その原理は、外側と内側の各手先において、最外郭の手先とその内側の手先に秤肘木を組み、それより内側の手先や柱真には通肘木を組むことである。このような組み方は、12世紀頃の鳳停寺極楽殿の唐家の組物で確認でき、虚梁を用いた建築の組物にも、その原理は継承されていた。

また、正結合の形式として梁と組物が組まれた意匠も、規範となる外部表現に含まれている。梁と組物との正結合の形式類型は、出桁受通肘木を基準に、梁が組まれ木鼻を出す位置より、〈A類型〉と〈B類型〉に分けられ、虚梁と組物との結合も、結合類型ごとの正結合の形式に従っている。

規範となる外部表現が存在したのは、定型化された構造と意匠を整えた多包系建築、つまり、造営の際に模範となる正統的な多包系建築が成立していたことを意味する。虚梁を持つ14世紀以後の多包系建築の組物は、12世紀頃の鳳停寺極楽殿唐家の多包系組物の構成を継承している

ことから、12世紀から13世紀には正統的な多包系建築が成立していたと推定できる。

虚梁の発生は、多包系建築において、梁と組物が組まれる「正結合式の梁架構」から来る制限性に起因した。平斗椽に梁を掛け、梁頭形の木鼻を出すということが、梁の掛かる位置を側柱列の平面配置に従属させる。また、組物において、手先の数によって、梁の載る段が決まることで、梁の高さを自由に設けられない。さらに、三分頭形で代表される梁頭形の木鼻を持つ梁が、室内における梁の身、そのままの規格で組物に組まれ、その木鼻が出桁を受けることで、組物の外側の手先の数が増えると、出桁の出も長くなるので、梁の木鼻が出桁を受けるためには、さらに大径の長尺材が必要となる。

定型化された外部における表現論理、即ち、正統的な多包系建築の計画論理に対応しながら、「正結合式の梁架構」から来る制限性を乗り越えるための方案として、虚梁が考案されたと言える。虚梁を用いることで、外部意匠の論理から解放され、室内空間の梁架構を自由に構成できるようになり、建築ごとに要求される個別的な計画への対応が可能となった。

高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系組物は、鳳停寺極楽殿唐家系列と平壤崇仁殿系列の二つに分類することができた。鳳停寺極楽殿唐家系列と平壤崇仁殿系列の組物は、高麗王朝の政治や貴族文化の中心であった開城の宮殿と官宮、宗教建築で、造営の際に模範となる形式として成立していたと推定される。そして、14世紀以後の多包系建築に主流となる鳳停寺極楽殿唐家系列の組物と、一部の官宮建築と宮殿建築に見られる平壤崇仁殿系列の組物は、高麗時代末・朝鮮時代初期の多包系建築において、造営の際に模範となる組物の形式、つまり、正統的な組物の形式として位置づけられる。